# 論說

## 武士道の趣味（上）

講師　湯原元一

武士道といへば、誰も無韻武骨の氣風をのみ尚ぶものと思ふは道理なり。奈良平安の榮花の夢、未だ全く醒めざる源平時代にこそ、青葉の笛の音に東夷の腸を斷ち、舊都の花の詠に敵人の袖を濕したる風流を、後の世に傳へたる武者もありつれ。應仁以來所謂戰國の世となりては、群雄四方に割據し、攻城野戰に惟れ日も足らず。此時に當りて、上下將卒の懷に往來せるは、人の國を奪ふの畫策と、人の首を獲るの工夫。是を外にしては、胸中殆んど他の念慮を容るゝの餘地なき有樣。寂々漠々、世は實に殺風景の極りなりき。唯、猿樂は武家の式樂として、當時に行はれたる唯一の美術なりしも、これさへ武骨なる參河武士は、武士道の敵として擯斥しぬ。一書に

酒井忠勝空印の曰、猿樂は武家自分爲すべき業にあらず、其家の者こそ、面白けれとて、自分は元より、子息家士等までも禁ぜられしと也。或時尾張光友卿にて、御嫡子五郎綱誠卿御遊ばされしを、御自慢心にて忠勝へ御見せありしにさらに感心せずして申さるゝは、大人として勿体なき御事なり、他人へ仰付られ然るべし。御稽古の事にても、はや御器量の程も見へ申候と止められ候。成瀬に向ひて、武家は幾度も武を講ぜらる事こそ本意ならん、大人公子の御身として、幽靈女の眞似更に益なし。故に達て申上て止めたり。

これ獨り忠勝のみならず、心懸ある武士は皆此心なりき。されば當時にありて、今日の如く、年少子弟

に唱歌音樂を授けて、審美的の情操を涵養せんなどは、實に夢にも想はざりしは云ふまでもなきことなり。

然るにかく打見たる所にては、武骨一筋の武士道中にありて、平家の公達の風流にもまして、一種優雅の審美的趣味の、尤も盛に發達せるものあるを見ること面白き限りなれ。武骨の武士の情操に、審美的趣味の尤も盛に發達せりといはゞ、語中既に意義の衝突あれば、容易くは信せざる人多からんも、實際の事實あるは掩ふべからざるなり。武士道に、武士の面目といへることあり。從前の學者は、これを以て、武士特有の道德と思へるが多し。されども、細かに歷史の事實に徵して講究するときは、こは斷して尋常善惡の標準を論ずる道德學上より、滿足に解釋せらるべきこと柄にはあらず。全く武士特有の趣味を表し出せる言葉にて、審美學上の問題に屬すべきものと知らる。

然らば、所謂武士の面目とはいかに。其の意義の浮泛なる、中々に其の精嚴なる定義を下さんことは、思ひもよらざることなれども、若し其の表現する箇々の事實につき、詳細の觀察をなさば、少くも左の如き場合を區別するは難からず。

(一)武士は敵に脊を見することを恥ちとすること。　こは戰國の武士に限れるにはあらず、遠く萬葉の昔に「そびらに矢は立てじ」と、いさましくも謠ひ出でしを始とし、後の代にて「敵に背を見せ玉ふはきたなし返させ玉へ」など辱めて、北げゆく敵を呼び止むるは、武士の之を恥ちとせるが故なり。戰國に至りては、この感一入に强くなりしやうなり。此時に當りては、敗軍の折りたにも、必ず殿りをたき、狼狽の体を見せざるやうに心を用ひぬ。小牧の陣の本多忠勝、關原の戰の嶋津義弘が引上げ振りは、當時敵味方の間に傳へて美談となせり。

(二)武士は下賤のものに敵に首を授くることを恥ちとすること。　イザ組打といふ場に臨みて、双方名乘り合ふは、敵を擇ばん爲めにて命なき後だにも、大切なる首を名もなき下司の手にけがされじとの心懸なり。これも源平の昔よりの習はしにて、彼の熊谷次郎が敦盛を組伏せて、其の名を問ふ言葉に、

抑も誰の御子にて渡らせ給ふぞと問ひければ、只とく切れとぞ宣ひける。斬奉り、雜人の中に棄置き進らせんも、便なく侍り、うきふしも知らぬ、東國の夷下鶏に逢うて、名乘るまじと思し召さるゝか、それも理りに侍れども、存ずる旨ありて申すなり。とあるは、世にも名高き物語にて、誰も知れることなり。此他にも、之に似たる例は擧げて數へがたし。

(三)武士は頭と顏とを毀けらるゝことを恥ちとすること。　明智光秀が謀反は、彼れが頭を打たれ額を傷けられたるを、無念に思ひしより起りしといふ人あれども、歷史家は取らざるべし。されども、當時武士の常情よりしては、左思ひしも道理なきことにあらず。關原の戰の後、伊奈圖書が切腹するに至りしは、事の起り、全くこの心に基くが如し。一書に

關原御陣後、福嶋朝臣の使者伊奈圖書の守り、新關に通行するとて喧嘩になり、輕卒等棒すくめにするとてあやまつて彼の使者の頭に當り、彼の者士の一分立たざる由申し斷り切腹しぬ。此より出入となり、本多佐州朝臣扱にて、伊奈家の足輕三人首きりて申譯せられけれ共、正則朝臣某が使者の首代、足輕何人賜はるとも利に當らずと難澁被申しかば、伊奈君自盡せられて落着に及べり。

かゝる類の物語は、尙他にも其の例多し。中にも廣く俗間に流行する芝居に、鏡山の草履打といふ

狂言は、當時この氣風は獨り男子のこならで、女子の間にまでも浸潤せる樣を想ひみるべし。

(四)武士は利勘の事を口にすることを恥ちとすること。　此事實も引出てんは容易なれど、一書に能く此氣風を寫し出せる說あれば、今且くは之を假りて幾多の實例に代ふ。

五六十年以前までは、諸浪人の身上をかせぎ候言葉に、乘替の一疋も繫ぎ申すほどに無之てはと申すは、知行五百石以上ならばと申す義に候。責て瘦馬壹疋も繫ぎ申す樣にといふは、三百石はとならば、と云ぬ計りの口上に候。錆鎗の壹本も持せ候樣にと申すは百石にても知行取といふ名に望を懸たる言葉に候。其時代までは、武士の古風殘り、我が口より何百石などゝ員數を定めては申出間敷との意地より、出たる言葉に候。鷹は飢ても穗を啄ず、武士は食はねど高楊枝、など申すも其時代の世話にて、年若き人は勝手損德の話、物の直段などをば口にいはず。

今の世の人の心を以て想へば、いかにも迂遠のやうなれども、打付に思ひのほど語り出でんより、中々に奧床しき心地せらる。總て當時武士の淸廉の意地は、かゝる微妙の間にぞ見ゆるなる。

(五)武士は死に臨みても容儀を損することを恥ちとすること。　源平の往時に、齋藤實盛が白髮を染めて陣に臨み、故鄕の軍に錦直垂を着けて赴きしは、世にも名高き美談なれども、戰國の時には、これにもまして優しくも又勇ましき物語あり。誰れも知れることなれども、此條下にはいはでかなはぬことなれば、前の例により一書の說を引く。

夏陣五月五日、木村重成風呂に入り、髮を洗はせ香を焚こめ、江口の曲舞紅花の春のあしたと靜に謠ひ、餘念なくに鼓を打しとかや。其翌日井伊の先陣と戰ひ、庵原助右衛門と鎗を合せ、花やかに討死したりけり。首は安藤長三郎取り、神君御覽し甲を取寄て、忍びの緒の端を切しを、上覽有

て、討死を究め覺悟したるこゝろばせ、天晴なる勇將かなと御感淺からざりしぞ。

同書に又曰く

木村重成事、夏陣五月始より食事進まざりしかば、重成妻女是を憂て申けるは、此度は落城近さにありと聞ゆれば、御食事のすゝまざるやと案じけるに、重成聞て全く左にあらず、往昔後三年の戰に、瓜割四郎是廣といふ者、天性憶病にして朝の食事咽喉を下らずして、敵陣にて首の骨を射切られしに、其疵の口より食物出て、諸人に恥をさらしけるとなり。我も首を敵に取られ、死骸の臟腑見苦しからぬ心懸にて、食事を慎むと答へたり。

重成が功業は、傳ふべきほどのものもなけれども、此末期の嗜こ至れるが爲めに、其の芳名は千歳の後にも朽ちず。大坂陣の頃は、家康の齡はいとふけたり。然るに此老翁の懷中、常に伽羅を絶たざりし由、舊記に見ゆ。合戰の前日には、月代をそり首を洗へなどいふも、當時心懸淺からぬ武士の戒めと聞く。

## 後奈良天皇

在大學　武藤虎太

一世を擧て滔々たる激流奔波の中に在り、強は弱を併せ、長は少を凌ぎ、群雄方隅に割據し、雲燕龍變機の乘すべき有れば則動き、勢起つべければ手に唾して興り、虎視耽々互に尺寸の地を爭ふ、譬へば嬰兒の暗中に鬪ふが如く、喧怒騷擾、甲僵れ乙起り、朝廷の威令更に行はれず、亦焉ぞ謂は所る義戰と稱すべきもの有らんや。是時に當り空拳を振て逆流に溯り、狂瀾を翻へし、天日を既に墜んとする